

Japanese man In NY (ニューヨーク生活)



(Photo: New York 42nd Street)

《42丁目の夕日》

今年に入ってから公開された映画『ALWAYS 三丁目の夕日 '64』を見に行っただ。この映画の原作は、1955年から1964年までの「夕日町三丁目」を舞台に描かれた西岸良平による日本の漫画作品『三丁目の夕日』で、2005年『ALWAYS 三丁目の夕日』、2007年『ALWAYS 続・三丁目の夕日』に続く第3作目の実写映画作品となった。

第1弾～第2弾と見ていたため迷わず見に行っただが、今回も良かった。自分が生まれる前の高度経済成長期の頃の東京が舞台となっていたが、この映画を観終わってふとニューヨークを思い出してしまった。1993年から4年間しか暮らしていなく、それまでは日本で生れ育ったコテコテの日本人なので、『三丁目の夕日』を見た後の感覚とは少し

異なるが、そういえば自分が好きな洋画には昔のニューヨークの風景が登場する作品が結構多いな…と思っただけ。

その中でも一番好きなのは、1984年製作のアメリカ・イタリア合作のギャング映画で、セルジオ・レオーネ監督・脚本の『ワンス・アポン・ア・タイム・イン・アメリカ』。エンニオ・モリコーネの音楽も素晴らしいが、ポスターやDVDのパッケージに描かれているマンハッタン・ブリッジのたもとの景色（本誌創刊号の表紙ではこの感じをパクらせてもらいました）をはじめ、作品全編に登場する禁酒法時代のニューヨークの風景が味わい深い。

また、2005年に公開されたアメリカ映画で、1933年の第1作のリメイク作品となったピーター・ジャクソン監督の『キング・コング』の冒頭部分では、地下鉄ではなく地上高架橋の上を走る鉄道なども登場する古き良き時代のニューヨークの風景が登場している。個人的には、自分が住んでいたアッパー・ウエストが舞台となっている1998年公開のアメリカ映画で、トム・ハンクスとメグ・ライアンが共演している『ユー・ガット・メール』も懐かしかったが、時代的には現代そのもの。

その他、クリント・イーストウッドが監督・製作を務めた1988年のアメリカ映画で、ジャズ・サクソ奏者チャーリー・パーカーの音楽と生涯を描いた伝記映画『バード』は、書物や写真などから想像する他なかった1940年代から1950年代のジャズの熱気が凄かったニューヨークの雰囲気が伝わる。また、1976年公開のアメリカ映画で、ロバート・デ・ニロが主演を務めた『タクシー・ドライバー』、1976年に公開されたアメリカ映画で、1950年代のニューヨークを舞台にした『グリニッチ・ビレッジの青春』等も好きな映画だ。

その他、ウディ・アレン作品や有名なクラシック映画をはじめ、ニューヨークを舞台にした映画は数多くあるが、現代のCGの技術で古き良き昭和の風景を蘇らせてくれた『三丁目の夕日』のように、古き良き時代のニューヨークを舞台にしたジャズ映画等の登場に期待したい！

ちなみに、今回のタイトルは「42丁目の夕日」にしているが、とある夏の日の夕方、マンハッタンの42丁目界隈から眺めた夕日は綺麗だったなあ…と思っただけです。